



景観シンポジウム 景観から考える北海道の食・農・観光 景観法制定10年と景観を活かした地域活性化

国土交通省北海道開発局事業振興部
都市住宅課

「北海道の景観」は、都市空間で形成される景観だけではなく、北海道特有の美しく豊かな自然環境や気候風土といった特徴的な地理的資源に加え、人の営みの中で形づくられた広大な田園風景などが融合したカントリーサイドの景観とともに形成されています。

景観は、地域イメージと関連づけられ、相乗効果を発揮して、食・観光など地域産業の「ブランド化」を可能にします。特に、自然景観・田園景観に強みを持つ北海道の観光産業は、食にかかわる産業をはじめ、地域の産業や雇用の創出などへの波及効果が大きく、地域経済を先導する役割が期待されています。

今年、景観法公布から「10周年」を迎える節目の年に当たります。

平成26年10月15日に札幌市で国土交通省北海道開発局、北海道、(独) 土木研究所寒地土木研究所が主催した景観シンポジウム「景観から考える北海道の食・農・観光～景観法制定10年と景観を活かした地域活性化～」では、景観を持続的に「食・農」や「観光・まちづくり」へ展開していくために、今、北海道の景観に何が期待されているか、主体となる市民・企業・行政がそれぞれの役割のもとでどのように結びつきを強めていくか、人材をいかに育てていくか、景観を活用した取り組みをどう広域的につなげていくかなどについて、様々な視点から議論しました。

基調報告

景観法成立以降の景観行政の歩み

景観法成立の背景には、高度経済成長時代の景観の悪化に伴い景観条例などを策定する自治体が全国で非常に増加していた状況があります。

しかし、法による後ろ盾のない行政指導だけではできない部分が生じ、法律的にある程度規制力のあるものも欲しい、国民共通の理解のベースになる法律が必要との議論が出てきて、景観法ができました。特徴は、何よりもやはり「良好な景観



椰野 良明
国土交通省都市局公園
緑地・景観課長

が現在と将来の国民共有の資産」であると初めて明示したことです。

2004年の景観法公布から10年が経ち、平成26年3月末時点で景観行政団体^{※1}が613団体、景観計画作成が429団体、その他、景観法に基づく景観重要建造物^{※2}など、さまざまな制度が活用されている状況です。景観法に基づく景観計画を全市区町村の21.8%が策定済みですが、東北地方と北海道は、全国に比べるとやや低いという実態があります。各地方公共団体の行政ニーズに合わせ、ぜひ景観法を活用し、景観行政を進めていただきたいと思います。

人口が多いところや国宝建造物、重要伝統的建造物群保存地区などの守るべき対象が明確になっているところは景観計画を策定し、一定の規制をかけて景観を守るという傾向があります。

行政面では、広域的な景観形成が一つ課題になっています。行政区域を越えて景観を守るとき、自治体が違うと調整は困難ですが、木曾川兩岸の愛知県犬山市と岐阜県各務原市^{みかづきはら}では、県を跨ぐ協議会^{また}を作って、犬山城天守閣から見た眺望景観を守っているという事例があります。

また、新潟県村上市では、市民主導の活動として黒堀プロジェクトが進められています。堀の町としての景観づくりのため、寄附を募り市民が塗ったという事例です。今後、景観行政を進めていく上で、市民の皆さんの協力も不可欠です。

話題提供

景観から考える北海道の食・農・観光

北海道全体で都市計画区域、つまり都市のような地域は、実は7.7%しかありません。そこに、北海道の総人口の70~80%が集中しており、大多数の道民は都市的な景観のところに住んでいることになります。これらの方々が景観について考えるようになったきっかけはさまざまですが、見慣れた



坂井 文 氏
北海道大学工学院工学
研究科准教授

景色が異質な看板や建築物の出現によって異なるものになったとき、景観について考えることが多いようです。

このような背景から「住民のための景観」というものがあります。福祉行政や教育行政は人命が懸かっていますから、行政が非常に力を置くのは、ある意味当然です。他方、景観行政がなくても、どなたも亡くならないかもしれない。ただ、まちは死ぬかもしれない。共同体がどう生きようとしているのか。景観は共同体としての価値観を提示するメッセージともいえます。その共同体とは何か。たとえば、北海道は開拓で農業、漁業、林業を進め、それが一定の形になって集落、文化という形になった。その共同体のメッセージを残さないと、地域のアイデンティティーがなくなります。景観は生業^{なりわい}の蓄積です。この生業、つまり第1次、2次、3次の産業の新しいあり方や見せ方を作っていく必要があります。また、第1次と第3次の産業の距離が近い北海道ではその可能性があると思います。

そもそも美しいまちは住みやすいまちといえます。住環境向上のため、景観には自らが住む地域の価値を高める意味もあるということを考えなくてははいけない。

一方、北海道は、多くの観光客、それもリピーターが多く来ています。最近はレンタカーで自由設計の旅行を行っているため、多様な価値観で、多様なおもてなしを提供する必要もあります。観光客を増やすため、魅力ある景観を保全し、綺麗^{きれい}に見せようと視覚だけに偏らない、他の四覚一味わう、香る、聴く、触れるという風景も一緒に提供できないか。「五感で体験してもらおう景観」、「来てもらおう景観」がさらに観光客を増やすことになります。

誰のための景観か、住民と観光客の話をしましたが、実は同じ人間で観光客が住民になるかもしれない。ただ、住民は、日常的にその場所において役者・アクターとして景観を見せている。観光客は、それを非日常の観客として観ている。事例紹介の5名の方は、このアクターだと思います。しかし、実は住民全員がアクターです。景観を良くしていこうというアクターを増やし、ネットワークを持って活動できるように、行政は共同

※1 景観行政団体

景観行政を担う主体で政令市、中核市、都道府県。その他の市町村は、都道府県知事との協議・同意により景観行政団体になることが可能。

※2 景観重要建造物

景観行政団体の長が積極的に保全するために指定した、地域の自然、歴史、文化等からみた景観上重要な建築物、工作物。

体としての方向性を示し、さらに多くの住民が継続的にアクターとしてよりよい景観をつくっていく、そんな循環ができればと思っています。

事例紹介

美しい景観・文化をお客さまと作り上げる

大西 祖父の代からの旅館業ですが、時代が変わる中、北海道でしかない体験やおもてなしをもっと突き詰めていこうと考えています。今は、郷土力という言葉テーマに、世界で北海道にしかない旅を創造することを企業理念としています。



大西 希氏
鶴雅グループ取締役

厳しい規制により美しい自然が守られているからこそ、お客さまが美しい時を過ごせるのだと、国立公園内で事業運営する責任を常々感じています。

大学を卒業後、台湾、シンガポールの旅行会社で研修をし、特にシンガポールでは道内旅行に来る方の添乗員を経験しました。海外の方々と道内のドライブ旅行をした際は、ルートは自由で、美しく移り変わる景観を楽しめる、その移動自体が観光資源だと初めて気付きました。それまでは、北海道は移動が長く生活者としては不便だったのが、観光とはルートなんだと実感しました。

今は、シーニックバイウェイという道内の魅力的な観光地と観光地を線で結び、ドライブ旅行ルートを盛り上げる活動をしています。また、阿寒湖では珍しいテラス席や足湯を作り、お客さま自身がその景観の中で絵になっていただくことを意識した取り組みをしています。最近では、夜の湖にマリモを模したLEDを投げたり、アイヌ古潭でたいまつ行進を体験したり、お客さま自身に美しい景観になって歩いてもらっています。イベントの最後に、必ず自然への感謝のメッセージにより、景観の大切さを伝えています。

景観をつくるには、内部からの目、私たち自身が生活者として住みやすいことと、外部の方が訪れてみたいと思う魅力と、それらが一体になる必要があります。この取り組みをさらに進めていきたいと感じています。

オホーツクの地域資源を掘り起こし磨き出す

大黒 オホーツク・テロワール^{※3}の活動のきっかけは、2009年のフランスカントリーホーム視察ツアーへの参加です。標高800mにある牧畜中心のボコールという村は、日本なら限界集落に近い環境です。そこに人々の生活と生産の営みがありました。伝統的な手法で自慢の乳製品を作る農業者がいて、その製品を評価する観光客がたくさん訪ねてくる。その発展として、都会の消費者ともよい関係がありました。



大黒 宏氏
ノースプレインファーム(株)
代表取締役会長

フランスの農村が自信を持って生産、生活することを促す数々の制度を見るにつけ、本当に北海道の農民が自信を回復できるチャンスが欲しいと思いました。帰国後、有志でオホーツク地域を再認識してみようという機運が生まれました。地域と一体となった食や農水産物に正当な評価を得たい。かつて厄介者と思われていた流水も、今は立派な観光資源です。併せて、人の営みがつくり出す生産の現場、例えば農業景観等の価値をつくっていききたい。地域資源、特に食と一体となった景観が評価され、観光客が来訪してほしいと思っています。

さらに、オホーツクで、行政区域を越えて連携して取り組むことの必要性を感じています。それを具現化するため、自分たちでスタートを切ろうと組織体をつくり、平成23年8月から一般社団法人オホーツク・テロワールとして法人化し、現在に至っています。

具体的には、オホーツク・マルシェの開催、北大マルシェへの参加、コープ札幌美幌店へのオホーツク・テロワールの実験店舗の出店など、オホーツクの農産品を中心とした生産物の価値の見出しと、評価の確認のためにいろいろ試行しています。

また、これらの生産物に、どう付加価値を付けていくのかが、もう一つのテーマです。平成24年度に北海道経済産業局農商工等連携対策支援事業^{※4}の認定を受けたので、農業の6次産業化とあわせ、制度を通じていろいろな方々を応援していきたいと考えています。

※3 テロワール (Terroir)

フランス語。本来は葡萄園(葡萄畑)の解説で生まれた用語。土壌・地形・気候・風土などを総称する。

※4 農商工等連携対策支援事業

地域経済の中核をなす中小企業者と農林漁業者が連携して実施する新商品、新サービスの開発等を支援するため平成20年に公布された農商工等連携促進法に基づき、補助金等を受けることができる。

みんなの連携で魅力ある街道をつくる

林 ガーデン街道は、旭川、富良野、そして十勝に跨がる250kmの道です。ドイツのロマンティック街道をヒントに2010年、ガーデン街道をスタートさせ、現在は8つのガーデンの他、ホテル、カフェ、スイーツ、チーズ・ワイン街道などをつなぎ、2泊3日の旅を作り上げる活動をしています。



林 克彦 氏
北海道ガーデン街道協
議会会長

庭を作れば人が来ると考え、「千年の森」を2009年、本格的にオープンしましたが、ほとんど人が来ません。旅行代理店に営業に行っても、十勝には見る場所がないと言われました。ガーデン街道ができる前は、十勝は通過型観光地の北海道代表として有名だったのです。

一方、「千年の森」から1時間半の場所にある富良野市の「風のガーデン」がドラマの翌年に一般公開となって、22万人ものお客さんが来ました。そこで、十勝の名前で有名観光地になるために、富良野を取り込みました。連携してみんなで創造すれば、必ず人は来る、当然ながら景観も重要だと思いました。

ガーデン街道は、今年で4年目です。再投資をし、仕掛け、話題性をつくっていく必要がありますので、景観への取り組みも行っています。北海道開発局とシーニックバイウェイ、地域住民の方々と一緒に国道250kmにヤマナラシという木を植えて景観づくりをする「100年の木プロジェクト」です。地域全体で景観づくりに取り組んでいます。

風景をつくり、地域の価値を高め五感を刺激するまちづくり

松岡 1985年に写真の町を宣言して「写真の町条例」を、2002年にはそれを踏まえて「美しい東川の風景を守り育てる条例」を作り、風光明媚な大自然を守り育てています。2005年に景観行政団体の指定を受け、今年の3月には写真文化首都という生意気な宣言をしました。



松岡 市郎 氏
北海道東川町長

東川町には、国道、鉄道、水道という三つの道がありませんが、北海道という大きな道があります。時間を軸にとると、私たちの町は大雪山、旭川市、旭川空港、旭山動物園等を含むエリアの中心に位置しています。

開拓が始まって120年、歴史は非常に浅くても、開発する余地「疎」があり、未来がある。それは私たちが考え、育てる余地があるということです。人口が8千人を切っていても、町を愛する住民がいる。住民には知恵の力がある。したがって、農村地域の「過疎」にどう価値を付けていくかが、大きな課題です。

まちづくりは、自然景観と文化景観を活かすことです。自然景観は四季を通じて素晴らしく、天から送られた手紙である雪は非常にバランスのよい飲料水です。文化景観の最も大きなものは、キトウシ山から見る景観であり、その他、学校、市街地、農家などがあります。ですから、私どもが目指すのは、「過疎」から「価疎」「適疎」なまちづくりです。文化首都らしい「疎」のある空間をどう作っていくか。それは、緑と遊ぶ空間によって農村の価値を高めていくことです。「百聞は一見に如かず」です。ぜひ皆さんお越しください。

ニセコの素晴らしい景観の中で匂いも感じて暮らしたい

ロス 北海道の観光は、素晴らしい大自然が一番のセールスポイントです。私は、もう一步踏み込んでその中に入りたい。景観に入るといことは、匂いもよく感じることもできます。マウンテンバイクで森の道を走ると、匂いを感じる事ができ



ロス・フィンドレー 氏
㈱NACニセコアドベン
チャーセンター代表取締役

のですが、僕の家蛇口からは、羊蹄山の湧き水が出ています。私は素晴らしい景観の中に住んでいると思っていますが、道民は傍らにあるから当たり前になっている。リゾートの建物は、景観を守るよりも大きい建物を作ってとにかくお金を儲ける手段になってしまった。何とか6階建てに収まっているけれども、周りの景観に馴染む木を使ったものではなく、コンク

リートのコンドミニアムになって、ちょっと残念です。

真夏には、小学生や一般の人などをラフティングに連れていきます。尻別川を下ると水が透明で、子供たちから「日本じゃないみたい」と言われる。でもこれは日本。それが自分にとってすごく意味があることです。子供たちがその気持ちを忘れずに持ち帰り、「日本はこんな素晴らしい景観があるところだ」と感じてほしい。

パネルディスカッション

坂井 私はこのシンポジウムをオール北海道の作戦会議にしたいと思っています。市民一人ひとりが景観について努力していかないと、景観はよくなりません。私も含め市民全員がアクターになる意気込みで、シンポジウムを終えたいと思っています。

5名の方が、今まで苦勞しながら景観について活動する中で経験した難問や苦勞、課題などをこの場で打ち明けてもらい、会場と共有したいと考えています。

松岡 まちづくりを進めていく際の課題は、行政自身も参加させてもらっているという、行政マンとしての意識改革の必要性です。

そして、住民、専門機関、民間企業等、さまざまな連携がありますが、連携の図り方がまだ定着していないところが、私どもの一つの大きな課題かと考えています。

坂井 連携に関して、ネットワーク化に取り組んだ林さんをお願いします。

林 ガーデン街道を立ち上げるときに連携の仕方が分からないので、観光協会とつながろうと思ったのですが、行政区の壁に突き当たり、民間でやろうと設立したのが北海道ガーデン街道協議会^{*5}です。結果的に、民間でやって良かったと思います。行政は、どうしてもバランスを整えてしまう。良いも悪いも全て一緒になってしまう。やってみて分かったのは、民間が率先して連携し、行政や観光協会がバックアップを行っていくべきだということです。

坂井 大黒さんの農業と漁業など業界の連携は、目に

見えないだけに、その苦勞も計り知れません。どんな経緯で「オホーツク・テロワール」まで^{たど}り着いたのですか。

大黒 7～8年前北海道で観光客が一番来ない町はどこかといったテレビ番組がありましたが、それが興部町なのです。そんな町で景観を語っても、食べていけない。われわれの農業をどう次の世代に引き継げるか、持続可能な農業の挑戦、例えば農薬や化学肥料を使わないとか、国土保全の立場から行くと生産性が落ちてくる。それをどう補うのか。生産性の低い部分を支えるには一人でやっても話にならない。オホーツクの強みは、スケール感です。来ていただきオホーツクがすごく広いと実感してもらうために、農業、漁業、林業、そこに商工の人や役場が入って連携する動きは始まったばかりです。

坂井 道のりは中々厳しい。生産性が下がり、収入が下がる中で、絶対やっていこうと思込めた。それはある意味ビジョンですね。新しい道は厳しくても、方向を決めて、今その道を行っているということですね。

私も、景観は生業の蓄積と言っています。生業は、生産性あってのもの。その生産性を下げてまでして、景観を保護したり、何かを行うためには、生産者が自ら納得する必要があります。

大黒 ヨーロッパ、スイスの農業政策では感動しました。四つの柱があり、一つ目が国民に対しての食の供給。二つ目は有機農業の推進。三つ目が景観の保持。最後に、人口の分散。その中心がアルプスの山岳酪農であり、景観を守るために補助金でプロモーションを上手に行っている。われわれはスイスへ行ってチーズを食べ、日本に帰って来てネスレのコーヒーやチョコレートを消費する。まんまと農業政策にやられています。北海道が連携すれば絶対それができるという一心で、オホーツクの田舎でも、自分たちのできる場所からやっています。

坂井 連携という意味では、ロスさんから景観を使いたいと思っても、別々の管理者でうまくつなげない場所もあると伺っています。

^{*5} 北海道ガーデン街道協議会
エリア内8施設のガーデン、6施設のオフィシャルホテル、地域の観光協会など19団体で構成。

ロス 私のビジネスは、アウトドアで遊んでもらうもの。山の場合は、ほとんどが国有林で、道有林、町有林、民間森が少し。国有林が大部分なので規則が厳しく、スキー場も雪上専用の区域も新しく開発できない。道有林も観光のための予算がないし、林道をつないで人やマウンテンバイクが走ることができない。

私の国、オーストラリアにはパーク・レンジャー（自然保護官）という職があり、一般の観光客が自然に触れるために、案内をしたり、道を作ったり、安全を確保するための組織的な活動をしています。北海道独自でも、そのような組織を作るべきです。森づくりセンターに駐在し、羊蹄山やニセコ連山の国や道が所管する情報をまとめて収集し、アクセス道路を作ることもできる人がパーク・レンジャーのイメージです。例えば羊蹄山を一周するサイクリングコースをマウンテンバイクで回り、観光客に北海道を体験してもらう。一周40kmなので、もう一泊する。羊蹄山登山もあるけれど、それ以上の新しいつながりがないので、パーク・レンジャーの組織を作ったら、国有林や道有林の新しい使い方を考えられるのではないかと思います。

坂井 今ある資源を、最大限に活用するための組織や考え方が必要なのですね。

大西さんの経験の中でも、楽しみ方というのは国によって違い、道民が気付かない部分があると伺いました。

大西 例えば台湾の方は、除雪車で雪が盛り上がっていると、もう喜んで、わっと駆け寄ったり、つるつるの路面を走って転んで、大笑いされたり。私たちにとっては、冬は内に籠もって暖かく過ごすのが贅沢であり、おもてなしのような気がしますが、外国のお客さまの冬の過ごし方に、逆に楽しみを教えられます。支笏湖の旅館では、入口から庭まで突き抜けたロビーを作り

ました。扉がないので、本当に雪が入り込むロビーですが、外国のお客さまは、真冬でもジャケットを着て、そこでお酒を飲まれたり、変化する気温を景色と一緒に楽しまれる。その姿を見て、北海道の未来のリゾートのあり方として、こういう過ごし方をしてもらえる施設と体験を提供しなくてはと教えられています。

林 ガーデン街道は、やはり冬になると一面雪景色で、閉鎖ですが、ただ、そこも連携だと思っています。

私が運営している千年の森からトマムやサホロには約30分で行けますので、従業員は冬場、お客さんが入るスキー場で働いています。また、トマムリゾートの敷地内で千年の森が行っているセグウェイ^{※6}ガイドツアーを観光客向けに連携して行っています。冬は冬の強みを持っている企業や地域と連携している状況です。

坂井 東川町も観光が大きな産業ですね。

松岡 観光資源は沢山あり、大雪山も写真写りがいい。そして、カメラはどの家庭にもある。そこで、写真文化に着目した経緯があります。

坂井 写真写りのよい町にするため、景観についてもっと考えようと景観条例を作ったということですね。

松岡 そうです。やはり「継続は力なり」で30年掛かりましたが、綺麗なものを撮ってほしいと、住民の意識が変わってきました。他の町も同じですが、自分の家の周りを綺麗にすると、自分自身も楽しめるし、来てくれた方に「綺麗だね」と言われて、満足感もある。そういう意識の共有を持続していきます。

坂井 今日の一つのキーワードは、やはり連携だと思っています。景観の場合、行政の中でどう連携していくのか、地域の違う産業をどういうふうに関連させるのか、違う人たちをどういうふうにつないで仲間づくりをしていくのかというのは、本当に大事です。

ふと景観が大事だと気付いたら、何がどう気になるのか、自分たちの町がどう気になるのか、そこから始めると、少し景観に対して、地域が考えるようになります。

オール北海道の景観をみんなが考えていけば、本当によくなると切に思っています。



※6 セグウェイ
米国で開発された二輪の高機能スクーター。立ち乗りし、体重移動で速度調節、方向転換を行う。